

ロシアと日本の環境への関心および価値観の異同に関する研究

高山 範理 (森総研・人総科大院)・ペトロバ エレナ (モスクワ大)・松島 肇 (北大院)

要旨: モスクワ (モスクワ大学) と札幌 (北海道大学) の国公立大学に通う学生を中心として被験者を集め、両国の一般的な環境に対する関心度、および価値観の概要を調べるため、NEP (New Environmental Paradigm) と、TBS(Thompson and Barton Scale Test)の2種類の調査票を用いて調査を実施した。その結果、①NEPの比較では、設問全体では有意な差は確認できなかったが、複数の個別の設問には、二国間で有意な差異が見られた。特に自然の持続的利用という意味でモスクワの意識が高い結果であった。②TBSの比較では、生態系中心主義性のほぼ全ての設問で、モスクワの評点が高く二国間全体で有意差もあった。人間中心主義性は、全体の平均では札幌の評点が有意に高いが、モスクワの評点の方が高い設問もみられた。特に自然の存在理由などに関する設問については、二国間で有意に考え方が異なることが確認された。また、環境に対する無関心の度合いは全体的に札幌の方が有意に高い結果になった。さらに、差異を生み出す要因として、過去の経験の影響や、キリスト教主義的な価値観の有無、文化的な規制の関与、教育の違いやマスコミなどを通じた情報の質および量的な違いが指摘された。

キーワード: 関心度、価値観、日露比較、モスクワ、札幌

I はじめに

日本とロシアは長い国境線を接しているが、お互いの気候・自然的、文化的、宗教的背景が大きく異なり、二国間の交流は疎遠である。しかしながら、ロシアの文化は欧米の文化を理解する上でも重要な入口であり、特に極東シベリアは国交が回復すれば日本人が頻繁に訪れる場所である。戦前にはツルゲーネフの『あいびき』などの紹介により、国木田独歩を初めとする武蔵野文学を通して、雑木林の風景美が紹介されるなど、ロシア人の環境に対する考え方や価値観が広まったこともあったが、未だ最も近くて遠い国のひとつである。このように、心理的に遠いロシアと日本においてお互いの考え方の異同を見出すことにより、異文化の交流に役立つ可能性がある。また、このような研究成果を相互に公表することにより、両国民が広くお互いの価値観や文化を理解することになり、今後の二国間の諸問題の解決にも役立つものと思われる。そこで、本研究では、両国の気候・自然条件がほぼ等しい地域を調査地とし、属性の近い被験者らに同じ調査を行うことで、両国民の環境観の異同の一端を明らかにし、同時にその異同の成因についても議論する。

II 研究の方法

ケッペンの気候区分ではほぼ等しい (Dfa: ケッペン気候区分で冷帯湿潤気候かつ最暖月気温 22°C以上の地域) 両国の都市であるモスクワ (ロシア: モスクワ大学)、札幌 (日本: 北海道大学) の国立大学を調査地とした。被験者

の特性について把握するため、プロフィールアンケートを実施した (表-1)。次に、両国の一般的な環境観の概要を調べるため、NEP(2) (New Environmental Paradigm, 表-2) と、生態系中心主義性、人間中心主義性、環境無関心の観点から調べるため TBS(3)(Thompson and Barton Scale Test, 表-3)の2種類の調査票を用いて7件法で調査し、結果を二国間で比較した。

III 結果

①NEPの比較では、複数の個別の設問には、二国間で有意な差異が見られた。特に自然の持続的利用という意味でモスクワの意識が高い (設問2, 7等)。しかし二国間の全被験者間の比較結果に有意差はなかった (表-2, 図-1)。

②TBSの比較では、生態系中心主義性のほぼ全ての設問でモスクワの方が高く二国間全体で有意差もあった。人間中心主義性は、全体の平均では札幌の方が有意に高いが、モスクワの得点の方が高い設問もみられた。特に自然の存在理由などに関する設問 (設問3, 18, 22) については、二国間で極端に (有意に) 考え方が異なることが確認された。また、環境無関心は全体的に札幌の方が有意に高い結果になった (表-3, 図-1)。

IV 考察

今回の調査では、①一般的な環境観に関しては二国間に極端な差がないことが分かった。②どれだけ生態系を中心に考えるか、環境に関心があるかの点で、よりモスクワの

Norimasa TAKAYAMA (For. Forest Prod. Res. Inst., Ibaraki 305-8687 · Univ. of Human Arts and Sciences, Saitama 339-8539), Elena PETROVA (Faculty of Geography, Lomonosov Moscow State Univ., Moscow), Hajime MATSUSHIMA (Research Faculty of Agriculture, Hokkaido Univ., Hokkaido) Study on the differences between Russia and Japan on degrees of interest and sense of values to environment.

意識が高いという結果になった。③環境に対する人間中心の捉え方については、二国間の考え方に違いがありそうなのが読み取れた。また、二国間の差異を生み出す要因を検討すると、両調査地は潜在的な自然環境や被験者の社会人口統計学的な要因などにあまり差がなく、表-1より、居住域における地形など、過去の経験の影響のみが指摘できる。一方、表-2および表-3を判読するに、国教であるロシア正教に基づく、『全ての自然は人間のために存在する』といったキリスト教主義的な価値観や、Bourassa(1)の指摘するような文化的な規制の関与が推し量れる。また、今回は調べていないが、札幌の学生は農学・林学を専門としている学生であったため、純粋な自然(生態系)保護よりは自然を利用しつつ保全したいという里山的思考が強いことが考えられるなど、両国間における大学等の教育機関での人間-環境系に関するカリキュラムの質および量の異同などの影響も差異を生み出す要因として思慮にいれ

る必要があるだろう。

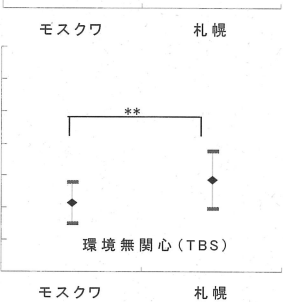
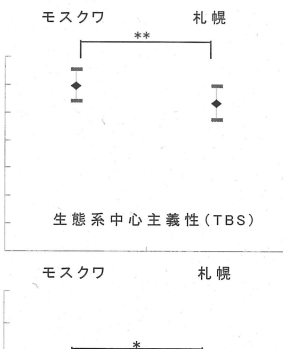
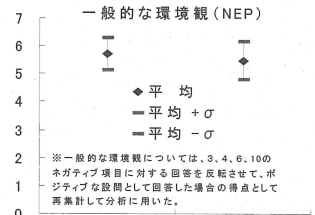
引用文献

- (1)BOURASSA,S.C.(1990) A paradigm for landscape aesthetics: Environmental and Behavior 22(6),787-812.
- (2)DUNLAP,R.E., Van Liere,K.D.(1978) The New Environmental Paradigm: A proposed measuring instrument and preliminary results, Journal of Environmental Education 9, 10-19.
- (3)KALTENBORN,B.P., Bjerke,T. (2002) Associations between environmental value orientations and landscape preferences, Landscape and urban planning 59, 1-11.

表-1. モスクワと札幌の被験者の概要

カテゴリ	アイテム	モスクワ	札幌	有意差
調査地		モスクワ大学	北海道大学	
被験者数		23人	20人	
性別	男性	10人(43%)	12人(60%)	
	女性	13人(57%)	8人(40%)	
平均年齢(標準偏差)		21.9歳(±2.54)	22.8歳(±1.99)	
専門	工学	2人(9%)	0人(0%)	
	自然科学	16人(70%)	20人(100%)	
	人文科学	4人(17%)	0人(0%)	
	その他	1人(4%)	0人(0%)	
職業	学生	18人(78%)	20人(100%)	
	室内労働職員	1人(4%)	0人(0%)	
	室外労働職員	4人(17%)	0人(0%)	
	教員	0人(0%)	0人(0%)	
	その他	0人(0%)	0人(0%)	
過去の居住地の都市度	市街中心地	6人(26%)	2人(10%)	
	居住区	12人(52%)	9人(45%)	
	郊外	3人(13%)	6人(30%)	
	地方	2人(9%)	3人(15%)	
現在の居住地の都市度	市街中心地	5人(22%)	10人(50%)	
	居住区	17人(74%)	9人(45%)	
	郊外	1人(4%)	1人(5%)	
	地方	0人(0%)	0人(0%)	
過去の居住地周辺の地形	平地	20人(87%)	10人(50%)	
	山地近辺	2人(9%)	10人(50%)	**
	海岸近辺	1人(4%)	0人(0%)	
現在の居住地周辺の地形	平地	23人(100%)	19人(95%)	
	山地近辺	0人(0%)	1人(5%)	
	海岸近辺	0人(0%)	0人(0%)	
平均旅行歴(標準偏差)	相手国を訪問した経験	0回	0回	
	シベリア旅行の経験	0.43回(0.51)	0回	
	海外の新開した国・地域数	1.39回(1.62)	1.25回(2.73)	

**p<0.01, *p<0.05, Chi-square test or Kruskal-wallis test



**p<0.01, *p<0.05, Anova
ロシア n=23, 日本 n=20

図-1. 比較結果

表-2. NEP 調査票の概要と分析の結果

番号	設問の内容	モスクワ(n=23)	札幌(n=20)	有意差
1	私たち人類は、地球が変わることのできる人口数の限界に近づきつつある。	5.26	5.85	
2	自然環境の均衡は非常に繊細であり、簡単に崩壊する。	6.00	4.5	**
3	人間には、自分たちの要求に合うように自然環境を変える権利がある。	2.74	2.95	
4	人類は、取り巻くすべての自然を支配するために作られた。	2.30	1.45	
5	人間が自然の恵みを防げるとき、しばしば悲惨な結果を生じさせることがある。	5.35	5.85	
6	動植物は本来、人間によって使われるために存在する。	2.00	1.6	
7	自然環境と調和した健全な経済を維持するために、今後私たちは産業の発達が制御されている経済体制のあり方を発展させなければならないだろう。	5.86	4.15	**
8	人間は生き残るために、自然と調和した生き方をしなければならない。	6.61	6.35	
9	地球は限られた空間と資源をもつ宇宙船のようなものだ。	6.22	5.5	*
10	人間は自らの要求に合うように自然環境を変化させることができるので、自然環境に順応する必要はない。	2.87	1.85	*
11	私たちの工業化された社会には、もうこれ以上発展することができない成長の限界がある。	5.00	3.85	*
12	人類は着しく環境を乱用している。	6.22	5.5	*
平均		4.70	4.11	
二国間全体の有意差 (NEP全設問に対する各被験者の平均値を二国間で比較):		P値: 0.2405		-
※3, 4, 6, 10の反転項目については、補正後に被験者の平均値を求めた				

表-3. TBS 調査票の概要と分析の結果

番号	設問の内容	モスクワ(n=23)	札幌(n=20)	有意差
Ecocentrism (生態系中心主義性)				
1	人口の増大によって、開発のために自然が破壊されることは望ましくない。	4.65	5.95	**
2	私は自然の中で、特に何もせず過ごすことを楽しいと感じる。	6.78	5.7	**
3	自然の中を歩くと、自然の美しさを感じることが出来る。	5.91	5.5	**
4	私は動物園で見る動物よりも、野生の動物のほうが好きだ。	5.74	5	
5	自然の中で遊ばれる時間は必要である。	6.48	6.1	
6	色々とまじりかかないとき、自然の中に出かけると心地が良い。	6.22	5.85	
7	破壊された自然を長くとることは、素晴らしいストレス減少効果がある。	6.57	5.65	*
8	自然の中に出かけることは、素晴らしいストレス減少効果がある。	6.26	5.85	
9	自然保護の重要な目的は手つかずの自然地域を保全するためである。	5.78	4.25	**
10	私は、動物が人間のように思えてくるときがある。	5.30	3.45	**
11	私は、動物が人間のように思えてくるときがある。	5.97	5.33	**
平均		5.77	5.33	
二国間全体の有意差: 生態系中心主義性全設問に対する各被験者の平均値を二国間で比較		P値: 0.0011		**
Anthropocentrism (人間中心主義性)				
1	森林開拓の歴史によって、新しい発見ができて新薬の開発が制限されることは困る。	2.48	4.9	**
2	キャンプの悪いところは、お金のかからないレクリエーションであることだ。	3.28	3.85	
3	森林伐採に関して心配なことは、将来の世代に十分な木材を残さないことである。	3.17	3.7	
4	川や湖をきれいに保つのは、人々がウォータースポーツを楽しむ場所をもうけるためだ。	1.61	1.7	
5	自然保護の重要な目的は、人間が生き残るためである。	4.83	4.1	
6	リゾートの悪いところは、お金を節約できることである。	3.22	3.75	
7	自然は、人間の幸福や喜びの源に重要な貢献をしている。	2.57	5.9	**
8	資源の保存をするのは、われわれの生活のクオリティーを保つためだ。	4.39	3.85	*
9	自然保護の重要な目的は、生活レベルを持続させるためである。	4.52	3.5	*
10	24. 生活のクオリティーが保たれる限り、継続的な土地の開発は良いと思う。	3.09	2.85	
11	私は、自然保護を推進したい。	3.15	2.87	
平均		3.15	2.87	
二国間全体の有意差: 人間中心主義性全設問に対する各被験者の平均値を二国間で比較		P値: 0.0037		**
Environmental Apathy (環境無関心)				
1	大抵の自然保護主義者は道徳的で、かなり偏った考え方であると思う。	3.00	4.35	**
2	環境問題に多大な関心を持つことは難しい。	2.61	2.75	
3	私は環境問題に関心がない。	1.83	1.75	
4	自然環境の保存や、環境汚染の防止、天然資源の保全を行うプロジェクトに反対である。	1.26	1.95	*
5	自然保護について、今まで議論がすすんでいない。	2.04	3.55	*
6	私は、自然保護を推進したい。	2.15	2.87	
平均		2.15	2.87	
二国間全体の有意差: 環境無関心全設問に対する各被験者の平均値を二国間で比較		P値: 0.0037		**

**p<0.01, *p<0.05, Anova